

袋井出身の起業家・近藤健次氏について

～日本トップクラスの臨床検査会社BMLと近藤文庫～

Kenji KONDO, BML Inc. and the KONDO-BUNKO in the Fukuroi city ASABA Library

小栗 勝也*

Katsuya OGURI

1. はじめに

袋井市（旧・浅羽町）大野出身の近藤健次氏は、日本の臨床検査業界でトップクラスの業績を誇る㈱ビー・エム・エルの創業者で、現在、同社の代表取締役最高顧問を務める人物である。

近藤氏は平成5年と平成16年の2回、郷里浅羽町に図書館の図書充実のため各1千万円を寄付され、更に平成19年には袋井市に文化振興・生活環境向上のため3億円の寄付をされた。地元にとっては例のない多額の個人寄付⁽¹⁾であった。これに対して相応の感謝の意を表するため、平成17年3月、浅羽町は閉町式式典において近藤氏に善行功労表彰を行い、また平成20年7月には袋井市が市政功労賞を授与した。袋井市表彰条例に基づく市政功労賞の表彰は、故・豊田順介氏（元袋井市商工会議所会頭）に次いで近藤氏が2番目となった⁽²⁾。

近藤氏の寄付を受けて、浅羽町立図書館（当時、現・袋井市立浅羽図書館）には後に紹介する通り、「近藤文庫」が設置され、その蔵書は今も広く利用者に親しまれている。3億円の寄付は、取り壊し予定の浅羽会館の跡地、既存の郷土資料館の前面に同資料館と一体となって運用できる形で新しく建設される「（仮称）近藤記念館」及び「（仮称）軽便鉄道メモリアルパーク」の整備費用の一部に組み入れられた⁽³⁾。平成22年度からその工事が着工され、11月頃に先ず記念館が完成する予定であると仄聞する。

（仮称）近藤記念館が建設される場所は浅羽図書館の向かいの敷地内になる。浅羽図書館では記念館新設を記念して、その落成前に、近藤氏と近藤氏の寄付により同図書館に設置された「近藤文庫」を紹介する展示会を図書館1階展示コーナーで実施したいという希望を有していた。実施期間は平成22年3月3日から4月末頃までの2ヶ月弱とすることも決め、図書館ホームページや市の広報誌等でも告知をした⁽⁴⁾。ただ展示の実務は自らの力では難しいとして、民間有志団体の「新袋井フォーラム」に依頼をした。

新袋井フォーラム（会長・小原望、副会長・下山好治、事務局長・小栗勝也）では、1月7日に正副会長及び事務局の会合を開いて正式にその仕事を引き受けることを決め、準備に取り掛かることにした。その際、近藤氏の七転び八起きの半生から、教育的意義を汲み取って紹介すべしとする小原望会長の意向に沿って実施することを確認し、展示だけではそれを伝えるのは難しいので詳しいパンフレットを準備して、展示会場で配布する案が採用された。実際の作業は1月中旬からスタートしたので、実質準備期間は1ヶ月半程という非常に短期間の内に、担当者は展示品の収集と制作、及びパンフレット作成の作業を突貫工事的に行い、何とか無事、展示会開会に漕ぎ着けた。本稿執筆中の現在、「近藤健次氏と近藤文庫紹介展」は開始されたばかりである。

展示会用のパンフレットは文章執筆を小栗が担当し、3月1日に印刷が完了した。本稿はそのパンフレット原稿を基にリライトしたものである。但し、パンフレット原稿と同じではない。多くの加筆と一部の修正を行い、パンフレットにはない考察部分も加えた。更に詳細な出典も明記して、後日の検証に耐えるようにした。本紀要に掲載することで、永続的記録として残し、袋井出身の立志伝中の人物・近藤氏のことを、いつでも知ることが出来る機会を提供することを目的として、本稿を改めてまとめた次第である。

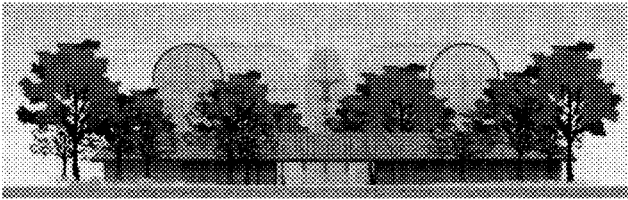
そう思い立ったのには理由がある。パンフレット原稿執筆中の1月末から2月中旬頃、折に触れて筆者の周囲にいた静岡理工科大



近藤健次氏（平成9年 勲五等受章時）

2010年3月5日受理

* 総合情報学部人間情報デザイン学科 兼 理工学部情報システム学科



(仮称)近藤記念館イメージ図 (平成22年11月頃完成予定/
手前の平屋建物/奥の丸屋根の建物は既存の郷土資料館)

学の教職員十数名に尋ねたところ、近藤氏の名前を挙げて
もご存知の方は一人もいなかった。BMLのことは、川越の総
合研究所を見学に行ったことがあるという教員が1名(物質科
学科・食品化学研究室の教授)と、血液検査の結果を記し
た伝票の下にBMLの文字を見た記憶があると答えた教員が
1名いただけであった。研究所を見学した教授以外は、自分
の専門分野とBMLとは全く関係がないので、教職員とはい
え一般人と変わりはない。ごく限られた範囲の結果ではある
が、それでも、近藤氏及びBMLが一般には殆ど認知されて
いないことを示す一つの指標になろう。恐らく袋井市内の他
の場所で聞いても、あるいは本格的な調査をしても、結果は
さほど変わらないのではないかと推測する。

要するに、近藤氏のことは知る人ぞ知る存在ではあっても、
地元でも広く知られているとは言い難いのが実情である。だ
から紹介展が今回初めて行われた訳であるが、準備中に上
のことを改めて強く感じた。しかし、展示会とそこで配布す
るパンフレットのみでは、展示会終了と共に霧消することにも
なりかねない。本紀要に掲載しようと考えた理由はここにある。

2. 近藤健次氏の半生

(生い立ち) 近藤氏は大正15年1月、静岡県磐田郡幸浦
村大野(後の浅羽町大野、現・袋井市大野)に7人兄弟姉
妹の四男として生まれた。実家は「せんべいや」という屋
号の万屋(よろずや)を営んでいた。ちなみに現在でもこの
お店は同じ屋号で存在しており、近藤家本家を継いだ健次
の兄・八十次の長男が経営している⁽⁵⁾。近藤家は万屋以外
にも仕出し料理を提供する業務も兼ねていたが⁽⁶⁾、こちらも
現在でも「三富士」の屋号で大野の地で近藤家本家が営業
を続けている。他に農業や漁業も行うことがあったという。

1歳半の時に母が病死したため、兄が健次を背負って小
学校に行くなどして世話をしていたが、兄姉に重い負担をか
けている実状を察した父は、健次が2歳の時、彼を近くの寺
(大福寺・現存)に預けたことがある。近藤氏がそのことを知る
のは物心ついた後であるが、初めて聞いた時は、自分は親
に捨てられたのだ、と感じたという⁽⁷⁾。実際には、寺に行った
末弟を心配して姉らが勝手に健次を連れ帰ることが何度もあ
ったため、父は正式に寺に申し入れて健次を家に戻している
ので、預けられた期間はそう長くはなかったと思われる。

健次少年は地元の幸浦尋常小学校(現・浅羽南小学校)
に進み、同高等学校を卒業する。高等学校卒業後は東

京で就職するつもりでいたが、同じ高等小学校で上京するこ
とが決まっていたのは近藤氏を入れて2人のみであった。当
時の健次少年は、少年らしい青雲の志を抱いており、東京で
「偉くなる」ことを夢見ていた⁽⁸⁾。そこで卒業直前の昭和14年
3月、東京電燈(現・東京電力)の就職試験を受けたが、そ
の際、健康診断で肺結核とされ不合格になってしまった。少
年の夢は無残に打ち砕かれてしまった。しかも実家から見
ると結核患者がいることが知られては商売にならないので、そ
のことは秘密にされ、健次は自宅の一室に隠されるようにして
約1年の療養生活を送る羽目になる。しかし、後に浜松の病
院でレントゲンの再検査を受けたところ結核は確認されな
かった。死病と言われた結核がこれ程簡単に治るはずがない、
東京での診断は誤診であったに違いないと姉らは考えたよう
で、それを聞いて近藤少年は悔しくて仕方がなかった。誤診
で人の人生が変わるようなことがあってはならない——後に
彼が医療関係の仕事を目指したのは、この時の悔しさがあつ
たからであるという⁽⁹⁾。13歳頃の多感な少年期に刻み込まれた
屈辱感が人の一生を支配することは、ままたることである。

(医療関連の仕事へ) 結核であったか否かは今となっては
確かめようはないが、東京の医者も誤診する程に健康状態
が良くなかったことは事実であろう。だから1年の自宅療養
生活もあった。ただ、健康を回復するとすぐにまた上京したい
と考え、昭和15年から、姉の嫁ぎ先である東京の熊沢家に寄
宿しながら、同家の口ききで実現した陸軍軍医学校防疫部
の備員の仕事をすることになった。実験室の手伝いの仕事で

【近藤健次氏略歴】

- ・大正15年、幸浦村大野(現・袋井市大野)に生まれる。
- ・昭和7年、幸浦尋常小学校(現・浅羽南小)入学。同高
等学校を卒業後、軍医学校防疫部で勤務。のち陸軍少
年通信兵学校を卒業し、出征、中国青島で終戦。
- ・戦後、上京後、東京公衆衛生研究所、日本製薬(株)で勤
務。その傍ら夜学で東京第一高等学校を卒業、次いで
同じく夜学の専修大学に通い昭和29年に卒業。
- ・昭和30年、「(株)相互ブラッドバンク」を創設。
- ・昭和51年、「(株)相互生物医学研究所」に社名変更。
- ・昭和63年、代表取締役会長に。
- ・平成元年、「(株)ビー・エム・エル」に社名変更。
- ・平成9年、勲五等瑞宝章を受章。
- ・平成13年、東証一部上場。
- ・平成19年、代表取締役最高顧問に。

【袋井との関連】

- ・平成5年、同16年に浅羽町に図書購入費各1千万円を
寄付。平成17年、浅羽町より善行功労表彰を受ける。
- ・平成19年、袋井市に3億円を寄付。平成20年、袋井市
より市政功労賞を受賞。

●現在は(株)ビー・エム・エル代表取締役最高顧問。今年
(平成22年)84歳。お子さんは2女1男。東京都在住。

あったが、ここで検査用の培地づくりや試薬製造などを覚え、さらに当時の実験室長・東照代さんの指導を受けながら勉学にも力を注いだ。近藤氏は、東さんこそは自分を臨床検査の道に導いた「最初の恩人」であると公言する⁽¹⁰⁾。

向学心に目覚めると勤務のかたわら、日本大学工学部付属工業学校建築科（夜間）に通い始めた。しかし無理が祟って体調を崩し1年半で中退を余儀なくされ、昭和17年暮、浅羽の自宅に戻って再び療養生活を送ることになった。

故郷で急速に元気を回復すると、田舎で逼塞していることに耐えられず再上京を決意し、昭和18年10月、東京・東村山市にある陸軍少年通信兵学校の入学試験を受け、これに合格した。お国のためになり、しかも授業料は不要の上、僅かな小遣いまで貰える所であったから、近藤氏には願ってもない学校であった。

同年12月から、三度目の東京生活が始まる。少年通信兵学校は2年制の課程であったが、戦局の悪化から学生の半数は翌19年11月⁽¹¹⁾に繰上げ卒業となり、戦地に派遣されることになった。近藤氏もこの時の繰上げ卒業組であったが、そのころ病気を患い、20年3月卒業組に回された。

それが幸いした。11月卒業組の仲間は乗船した輸送船が米国潜水艦の攻撃により撃沈し、このとき生き残った者もルソン島における米軍との攻撃で殆どが戦死した。しかし近藤氏が属した3月卒業組の出征部隊は敵艦の攻撃に会うこともなく、無事に朝鮮半島に到着した。その後、彼は大陸各地を移動したが、青島に駐屯している時に終戦を迎えた。この間、実際に戦火を交える経験は一度もなかった⁽¹²⁾。

（戦後の起業） 復員して郷里に戻った近藤氏は、兄と製塩の仕事をしたり、実家の店先を借りて電気屋を開いたりしたが、昭和23年春から、再び東京の熊沢家に寄宿しながら、新しく設立された東京公衆衛生研究所の社員として、検査業務の仕事に従事した。この研究所勤務中に、夜学の東京第一高等学校の3年に編入し、同校を卒業した後は、同じく夜間の専修大学商経学部に入學している（昭和29年卒）。

昭和25年9月から日本製薬㈱に移り、朝鮮戦争で需要が急増していた輸血用乾燥血漿（プラズマ）を生産する主力工場の技術者として連日忙殺されることになる。しかし、暫らくすると朝鮮戦争が終結に向かい始め、需要が無くなったため、会社はプラズマ生産を中止し、同部門の技術者全員に退社勧告を出した。近藤氏も退社を迫られた。従業員は組合を結成し、近藤氏は委員長⁽¹³⁾として会社側と交渉を行ったが、需要そのものが断たれた以上、どうすることもできず、僅かの退職金を貰って会社を辞めざるを得なかった。

これが転機となり、今日に繋がる近藤氏の起業家・経営者としての人生が始まることになる。すなわち昭和28年春、一緒に退職した同僚ら十数人と共に「輸血協会」を起こして自ら事業を始めることにしたのである。面白いのは、同じ血液に関わる仕事であるという点である。もちろん、それまでの経験と技術を使える利点があるし、また、プラズマは需要がなくなっただけでも、外科手術の進歩に伴い輸血用血液の需要は

今後増すであろうという予測⁽¹⁴⁾があった上での選択である。

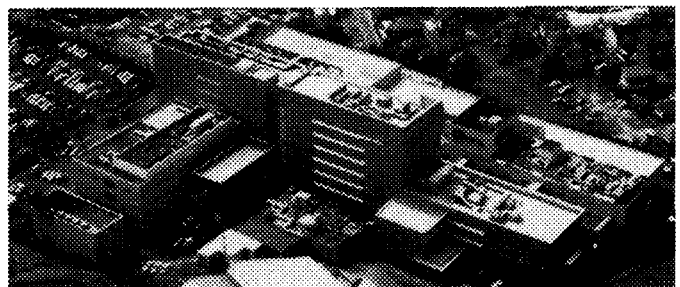
しかし、それ以上に近藤氏が「どうせやるなら同じ仕事をしてみよう」という気持ちを抱いていたが故にそれを選んだというところが、後にもう一度言及するように、近藤氏の性格の一端を窺うことができて面白い。日本製薬にも血液銀行があったので、それに対抗しようとしたわけである⁽¹⁵⁾。

ただし、最初の輸血協会は供血者を病院に紹介するだけの仕事であり、口入れ稼業に等しいことに抵抗を感じていた近藤氏は、国家ライセンスを得た上で保存血液を製造・提供するキッチンとした仕事をしたいと願っていた。そこで昭和30年7月、輸血協会を発展解消させて、新しく東京都渋谷区千駄ヶ谷に「㈱相互ブラッドバンク」を創設することにした。採血用ベッドが僅かに2床という日本で一番小さな⁽¹⁶⁾ブラッドバンクの誕生である。この時、近藤氏は29歳の若さであった。

（血液銀行から臨床検査へ） 会社創業当初は資金繰りや販路開拓に苦しむことが多かった。弱小ブランドであるが故のハンデから「相互ブラッドバンク」の名前では病院が購入してくれないために、止むを得ず、前の勤務先である日本製薬に頭を下げて⁽¹⁷⁾、そこに納品⁽¹⁸⁾する形で凌ぐこともした。昭和32年頃から事業は上昇気運に転じ、34年には一流大病院等からの注文が急増、ようやく大手他社に肩を並べるまでの信頼を得ることができた。関東一円に供給する体制も整い、順風満帆に今後も進むかと思われたとき、突如、不運な出来事が会社に降り注ぐことになった。

昭和39年3月、時の駐日米国大使エドウィン・O・ライシャワーが大使館前で刺されるという事件が起きた。直ちに手術を受けたが、その際に受けた日本人からの輸血用血液が原因で血清肝炎に罹ってしまった。その頃の日本では輸血を受けた患者の3割程が血清肝炎に罹っており、当時の水準では止むを得ないとされていた⁽¹⁹⁾。しかし、米国大使が日本の輸血で罹病したことは、日米関係及び日本に対する国際的評価に関わる大問題に発展しかねない。事態を重く見た時の池田内閣は、今後1970年までに輸血用血液は全て国民の献血で賄うこととし、その業務は日赤が担当し、民間からの血液供給（売血）は禁止するという閣議決定を下した。

近藤氏の会社にとっては「息の根を止められる」⁽²⁰⁾ような決定であった。このことがあって、血液銀行業務から撤退せざるを得なくなり、最終的には、臨床検査を主軸とする方向へ路線転換を図ることを近藤氏は決意する。しかし、既にいる従業員全員の給料を支払える見込みは全くなかった。そこ



BML 総合研究所(埼玉県川越市)

で希望退職を募り、多くを日赤その他に再就職させた。会社に残ったのは 17 名であった。当初は検査機器を購入する資金もなかったのに、注文を受けても検体を他の機関に運んで検査してもらい、その結果を注文主に届けることしかできなかった。当然、利益は殆どない。

なんとか食いつなぐ方策として近藤氏が考えたのが、従来のお得意先の病院の看護婦さんを相手に生理用ナプキン等のお買い得物品の巡回販売をすることであった。これが成功を収め、資金的余裕が多少出来たので、本来の道に戻り、臨床検査を自前で受託する体制構築に着手することができた。

すなわち昭和 42 年に米国製自動分析機及び中古の日本製自動分析機 2 台を同業他社に先駆けて購入⁽²¹⁾したことを皮切りに、本格的に臨床検査事業へと乗り出したのである。現在のビー・エム・エルに繋がる臨床検査事業がようやく本格始動したことになる。

この後も検査体制を整備するに従って、検査受託数は飛躍的に増えていった。とりわけ、早くからコンピュータシステムの導入（昭和 49 年 5 月に第一次コンピュータシステムが稼動）に踏み切ったことは、業界初の快挙であった⁽²²⁾。さらに 2 年後の昭和 51 年に、米国最大の臨床検査センターであるメトパス社のラボを視察して、巨大なスケールの自動化システムに圧倒され、コンピュータ化のレベルアップを目指す熱意を燃やすのであった⁽²³⁾。その熱意が結実したと言えるものが、後述する独自開発の全自動検査システムであり、それを平成以降に完成させ、導入できたことで更に飛躍が可能となり、業界トップクラスの実績を誇る今日の姿へと成長するのであった。

なおこの間に、会社名は、昭和 51 年に「㈱相互生物医学研究所」に、次いで平成元年に「㈱ビー・エム・エル」に変更されている。「相互生物医学研究所」の英語表記が BIOMEDICAL LABORATORIES であったので、その時から略称として「BML」の文字が用いられていたが、平成元年に正式にそれを社名に取り入れて今日に至っている。

3. 今日のビー・エム・エル

現在の㈱ビー・エム・エル（以下BML）は、連結・非連結の子会社計 21 社⁽²⁴⁾を傘下に置く企業集団の中心会社である。近藤氏が築いたBMLグループがいかに注目に値する企業であるかを、著者の視点から、以下の 6 点に着目して紹介してみたい。

第 1 に、BMLは日本の臨床検査業界で最大の事業ネットワークを有している点である。BMLだけで東京の本社以外に、北海道から沖縄まで全国 83 の営業所があり、実際に検査を行うラボは全国に 24 ヶ所ある⁽²⁵⁾。これらは全てコンピュータネットワークで結ばれているが、臨床検査業界ではBMLだけがそのようなシステムを有するという⁽²⁶⁾。BMLの検査作業は全てが標準化、統一化されているので全国どこでも均質な検査が可能である。現在1日に合計で患者 20 万人分以上の

検査を全国の病医院から受注している⁽²⁷⁾。

第 2 に、企業として優れた業績を挙げている点である。日本の臨床検査業界は 800 社程の会社があるが⁽²⁸⁾、その中で、BMLグループは売上高で第 2 位⁽²⁹⁾というトップクラスに位置している。しかも、昭和 30 年の創業時以来、一期たりとも赤字を出したことがなく⁽³⁰⁾、現在（2009 年 3 月時点）の年間売上高はグループ全体で 772 億円程に上る⁽³¹⁾。また、BMLは平成 13 年に念願の東京証券取引所市場第一部上場を果たしたが、これは臨床検査会社としては初のことであった⁽³²⁾。

業績がトップクラスであるのは、全国の病院診療所から検査依頼が多数あるからであるが、肝心の検査内容が依頼主から見て満足できるものでなければ注文はもらえない。BMLに多くの検査注文が寄せられるのはそれなりの理由がある。その理由は以下に述べる特徴から生まれている。

第 3 に、BMLの最大の特徴は、臨床検査に求められる精度と速度の両立のために、検査の自動化を積極的に推進してきた点にある。例えば、埼玉県川越市にあるBML総合研究所には、独自に開発した全自動検査システム「フロンティア&シンフォニー」（BML独自の呼称）システムがある。検体の仕分けから分注までの検査前処理工程を自動化した世界初⁽³³⁾のシステム「フロンティア」（平成 3 年完成）と、複数の検査実施工程を自動化したシステム「シンフォニー」（平成 7 年完成）を組み合わせたシステムである。平成 20 年にはシステム全体の次世代型への移行が完成し、現在は“新「フロンティア&シンフォニー」”となっている⁽³⁴⁾。

新フロンティアシステムでは 1 時間に 12,000 検体を処理する能力がある。新シンフォニーシステムは検体自動搬送ロボットと分析装置が組み合わされたもので、生化学的分析なら 1 時間に 9000 検体を、血液学的検査なら 4900 検体⁽³⁵⁾の自動分析が可能である。

以上の設備を有するBMLの中心検査施設・総合研究所は、単独の検査所としては世界有数の規模であり、しかも世界に例のない無人検査システムが稼動していることで注目されているという⁽³⁶⁾。なお、同研究所は初代のフロンティアシステムを導入した翌年には、米国臨床病理医協会（CAP）の認定証を授与され、また「世界初」の高速自動検体分取分配システムが評価され、日経済新聞社主催の「'92 優秀先端事業所賞」も受賞している⁽³⁷⁾。

さらに、上のシステムとは別枠であるが、従来では自動化



ロボットが検体を運ぶ「新シンフォニー」システム

が難しいとされてきた特殊検査分野においても、例えば甲状腺関連検査に全自動化学発光免疫測定装置を導入したり、微生物学的検査に菌種同定の自動化システムを導入するなどして効率化に力を入れている。特に微生物学的検査では自動同定システムの他に、業界初の鏡検データの音声入力装置も導入されており⁽³⁸⁾、その結果、現在のBMLの微生物学的検査は1日に約7000件の処理能力を有する。これは日本どころか「世界最大級」であるという⁽³⁹⁾。

至る所に業界初、世界的規模等の文字が躍るBMLの自動検査技術だが、それは当然、高精度化と低コスト化にも繋がる。同じ検査であるならば検査料が安い方が歓迎されるのは自然のことである。BMLが多くの検査受注を獲得し、高い業績を挙げている最大の要因はここにあると思う。

第4に、検査の守備範囲が広いことも指摘しておきたい。BMLでは上述の自動化システムによる生化学検査・血液学検査などのルーチン検査から、細胞性免疫検査・DNA検査などの特殊検査まで、臨床検査の全分野の要望に応えられる検査体制が敷かれている。検査できる項目は4千以上⁽⁴⁰⁾に及ぶ。更には医療以外の食品衛生検査や環境検査等の分野にも進出し、グループ全体として積極的に検査範囲を拡大させ、幅広いニーズに応えようとしている。

第5に、検査項目の新規開発においても優れた実績を残している点である。たとえば糖尿病検査の指標として現在では欠かせないものになっている「グリコヘモグロビンA1c」の簡易検査方法を確立(昭和53年)したのはBMLである⁽⁴¹⁾。また膠原病マーカーの抗ENA抗体の新検査技術も開発している⁽⁴²⁾、日本糖尿病学会で「世界初」の脳下垂体抗体ルーチン検査を発表して注目を浴びたこともある⁽⁴³⁾。その他にも多くの研究実績がある。これらの成果はBMLが研究開発に力を注いできた証左である。BMLは業界で唯一、基礎研究部門を有している⁽⁴⁴⁾企業でもある。

第6に、最近では従来の検査分野とは別に、医療分野のIT化に対応した事業にも進出している。その代表例が電子カルテ「メディカルステーション」である。BMLが独自に開発したこの電子カルテは、平成12年から販売が開始されている。厚生省が平成11年からカルテを電子媒体で保存することを認めたことで全国の病院で電子カルテの導入に弾みがついた⁽⁴⁵⁾。しかし、大手の病院はオーダーメイドの電子カルテを持つ所が多く、そのためBMLの電子カルテは主に個人開業医の診療所向けに販売されている。診療所に限って見ると、2008年11月時点でBMLの電子カルテのシェアは22.3%で、日本一である⁽⁴⁶⁾。

なお、このBMLの電子カルテは、米国マイクロソフト社が主催するWorld Wide Microsoft Partner Program Award 2004でFinalist(最終選考)の表彰を受けている。この時、日本企業でこれを受けたのは10社だけであるが、医療分野ではBMLのみであった⁽⁴⁷⁾。

今後も電子カルテ等のIT分野に力を注ぐ路線に変わりはないようである。最近のBMLでは「バイオ&医療情報システ

ム企業」と自社をPRしており⁽⁴⁸⁾、創業以来のバイオだけでなく「医療情報システム」を提供する会社でもあることを強調している。

以上、6点からBMLの特徴を紹介した。同社の優れた能力と実績は、BMLグループに関わってきた全社員の長年に亘る努力の賜物であるが、その歴史の全てにおいて、代表取締役社長・会長・最高顧問として会社をリードしてきた人物は近藤氏であった。氏の存在なくしては今日のBMLは無かったであろう。84歳になられた今でも、週に2・3回は東京の本社に来られているそうである。

4. 教育的意義と補足的人物評

近藤健次氏の生い立ちとBMLを大成させた今日までの軌跡を振り返り、そこから今回の展示会及び展示会パンフレットに接した袋井市民、特に地元の児童生徒に知ってもらいたいこととして、筆者はパンフレット冒頭に次の3つのメッセージを記した。教育的効果があることを強調したいと考えたからである。

①世界的企業を作った袋井出身者 近藤氏が作った会社は血液検査等の臨床検査業務等を主に行っていますが、同社の自動検査システムは世界有数の規模と質を誇っており、業績においても日本でトップクラスです。近藤氏はたった一代でそれを築き上げました。その近藤氏が袋井市(旧・浅羽町)の出身であるという事実を、まずは記憶に留めて頂きたいと思います。功成り名を遂げた後も郷里を思う気持ちは強く、それ故に数度の寄付もされました。80を越える御高齢ではありますが、今でも昔のことを鮮明に覚えておられ、地元のご友人との交友も続いています。

②七転八起の生涯 近藤氏は少年時代から健康を害したり、誤診で就職ができなかったり、或いは大人になってからもリストラにあたり、国の方針転換で自分の会社の仕事ができなくなるなど、数々の不運に遭遇してきました。高校、大学は働きながら夜学に通いました。しかし、いつの場合も諦めることなく挑戦し続けて来ました。そのお陰で今日の氏があります⁽⁴⁹⁾。

たとえ転んでも何度でも這い上がってみせるぞ、という位の強い心意気は本来誰もが持っているべきものです。児童生徒の皆さんの年代においてもそうです。少し位の壁に直面して臆しては未来は拓けてきません。皆さんが、近藤氏に負けない位の逞しい大人に成長してくれることを大いに期待しています。

③己に厳しく他人に優しく 近藤氏は苦勞を重ねて成功を収めました。同時に周りの人には優しく接していたことが多くの人によって語られています。たとえば、少年通信兵学校時代には、厳しい訓練で疲れている仲間の洗濯を手伝ったり、しもやけの手当てまでしてあげたそうです。また、軍医学校実験室勤務時代に面倒を見て貰った室長を、

後に自分の会社に招き、その人が晩年には悠々自適の生活ができる位にまでしてあげました⁽⁶⁰⁾。つまり恩返しです。似たような例は他にも多くあるようです。若い皆さんも、情と恩義を大切に作る気持ちを忘れないで、他人に優しい人になって欲しいと思います。

これらの点は筆者が近藤氏に關係する資料を読んでいる時に感じたことであり、特に子供達向けのメッセージとして相応しいものを並べたものである。しかし、筆者が感じたことはこれだけではなかった。展示会用パンフレットには記していないが、以下、2点について記し、補足としておきたい。

第1に、近藤氏の負けん気の強さについてである。

恐らく生まれながらの性分と幼少期からの環境によると思われるが、近藤氏は非常に反撥心の強い性格の持ち主であると筆者は感じた。反動的、反社会的というような悪い意味ではなく、悔しさをバネにして、少しでも見返してやろう、少しでも上に伸長してやろう、という強い向上心の持ち主という言い方をしてもよい。簡単な言葉で言えば、負けん気が強いということになる。

例えば、高等小学校卒業時の就職試験の際に「誤診」と判断された、あのエピソードの時のことである。一年後に健康体に戻った時の祝いの席で、近藤氏はくやし涙を流し、やがて、それは「怒り」へと変わったと述べている。そして、再び上京する際には、漠然とではあるが「同じ職に就くのなら、医療関係の仕事をしたい」⁽⁶¹⁾という気持ちを抱いていたという。誤診によって自分の人生を狂わせた許し難い敵に対して、仇討ちでもするかのような意気込みなのである。

仇討ちや復讐という言葉を使うと大袈裟であるが、それに似た意識を抱いていたことは、近藤氏自身が「同じやるなら・・・」という表現を用いている所から、それを読みとることができる。反撥心、対抗意識、負けん気の強さ等々、それをどのように表現してもよいが、そのような傾向が近藤氏に強いことは間違いなさそうである。なぜなら、同じようなことが氏の半生の中で何度も見受けられるからである。だからこれは近藤氏の性分と言ってよいと思う。

戦後、勤務していた日本製薬から退職を迫られ、自ら起業したときも、どうせやるなら、「同じ仕事をやってやろう」⁽⁶²⁾という意識で日本製薬と同じ血液バンクをはじめている。明らかに日本製薬に対する対抗意識が彼を突き動かしている。

輸血用血液が献血に絞られ販売が禁止になり、臨床検査の仕事に転換する時は、「必ず日本一になってみせる」⁽⁶³⁾と誓って新事業に乗り出している。他を全て凌ぐまで諦めないぞ、決して負けないぞ、という意気込みなのであった。

また、未だ今日程の売上を計上していない頃の BML が、1987年に超大型コンピュータを導入した時には、同業他社や業界関係者から「あの会社は潰れるぞ、気でも狂ったか」と噂されたそうである⁽⁶⁴⁾。しかし、近藤氏はそうした声を耳にしながらも、微動だにしなかった。他から言われたくらいで簡単に取り下げるほど軽率な判断で選択した道ではない、と自ら

の判断を信じきっているからである。米国のメトバス社がコンピュータを用いた大規模な自動化システムを既に導入しているのを見た時以来、この道に間違いないと近藤氏は確信していたという⁽⁶⁵⁾。

それが必要であると考えれば、外野からの騒音は一切シャットアウトして、自らの道を進み続けるその態度の土台には、自分を「気でも狂ったか」と評した者たちを必ず見返してやるぞ、という熱い思いもあったのではないかと筆者は推測する。

また、これより前の昭和45年頃、某財閥系企業の部長が来社し、生き残りのため傘下に入るよう持ちかけられたことがあった。この時、近藤氏が要請を固辞すると、相手から「お宅だけが舟に乗り遅れてもいいのですか」という言葉まで投げつけられたという。近藤氏はそれでも動じず、バックグラウンドを持たない一匹狼でも生き残ってみせる、大資本になど負けてなるものか、という決意を新たにするのであった⁽⁶⁶⁾。他から明らかに見下げた態度を示されて、それでも膝を屈して媚びへつらうことは、近藤氏の気概が許さないようである。このエピソードにも氏の人柄がよく示されていると思う。

このように、近藤氏の負けじ魂は氏の半生の中でいかんなく発揮されていると思われる。それが、今日の成功に繋がっているからハッピーエンドの物語として語ることが可能だが、失敗していたら、ただの笑い物になる。この世の中、成功しなければ話にならないということである。無論、近藤氏が成功した背景には、氏の並々ならぬ苦勞の連続があったからであるが、それに耐えられた理由の一つとして、近藤氏の負けん気の強さが大きく影響していたのではないかと考える。

第2は、近藤氏の少年期から青年期の家庭経済環境に関する一つの疑問である。

氏が自ら語ったり著した物の中には、幼いころから貧しかった、お金がなくて苦しかった、という表現が度々出てくる。貧しいが故に苦勞して努力を重ね、成功を収めたというパターンは立身出世物語の典型であるが、近藤氏の場合もそれに当てはまるかという、筆者は多少の疑問を感じている。

例えば幼少期のことだが、全体として考えると、どう見ても貧乏な家で苦勞して育ったとはとても思えないのである。一時的、局所的、あるいは主観的には、貧しくて苦しかったという思いを近藤氏やその家族が感じたことはあったかもしれない。しかし、赤貧洗うが如きというような貧しさは近藤家にはなかったのではないかと、というのが筆者の率直な感想である。

例えば、高等小学校1年のとき友人が、「健ちゃんからぜんまい式の動くおもちゃを貰った思い出があります。ウルトラマンみたいな人形のおもちゃで、よくこんなに高価なものをくれたものだと感じました。」と述懐している⁽⁶⁷⁾。実際はそのおもちゃは健次の兄の持ち物で、友人には貸しただけで返してもらったというが⁽⁶⁸⁾、そうであったとしても、ここから分かることは、健次の家は、他人がうらやむようなおもちゃで遊べるだけの家であったということである。

また、別の同級生の一人は、「彼が学校に持ってくる弁当の中身に羨ましい思いをしたことも。席が近かったので見ると

はなしに見ると、いつもおかずが二、三品の仕出し風弁当。こちらとはいえば、つねに日の丸弁当なのですからね。それに当時、教材や弁当は風呂敷で包んで行くのが普通だったけれど、彼の場合はちゃんとしたカバン。何かと差をつけられていましたね。」と述べている⁽⁵⁹⁾。当時の近藤家が仕出し屋もしていたことから、健次の弁当にも幾つかそのようなおかずが入っていたということらしい⁽⁶⁰⁾。

昭和戦前期において、あるいは戦後直後においても、日本の田舎では、日の丸弁当、風呂敷、或いは草鞋履き、継ぎはぎだらけ穴開きだらけの衣服等々の小学生は、少しも珍しくはない。しかし近藤少年は日の丸弁当や風呂敷ではなかったのである。むしろ恵まれていた方ではなかったかと思う。

また、上京以後の近藤氏に関しても、たとえ病気になり挫折したとしても、自宅で療養生活をさせてもらえる位の家ではあった。少なくとも普通レベルかそれ以上であったはずである。もっともこれだけでは、裕福であったと結論付けることは早計であるかもしれない。内実は火の車で、それが健次少年には隠されていた可能性もある。しかし可能性の話なら、そうでない可能性もあり得る。正確なところは、よく分からない。

確かなことは、近藤氏の述懐を見る限り、自分の療養のために親兄弟に負担をかけて申し訳ないとか、有り難くて涙が出たとか、いずれは親兄弟に恩返しをしなければという気持ちで一杯であった、というような種類の記録はないということである。これに対して、既述の通り、療養のため田舎に逼塞していることを良しとせず、東京で一旗上げたいという衝動が充満していたということは何度も語られている。人間は内側にあるもの以外のものを外に向かって話すことはできない。また、申し訳ない、有り難い、という感情があったならば、何らかの形でいつか外に出さずにはいられないのが人間の情であると思う。しかし、療養中のことに関して近藤氏が述べていることは、親兄弟に対する感情の表白ではなく、自身が勇躍できずにいることへの苛立ちのみである。

もし、近藤家が赤貧洗うが如き状態の家であったならば、しばしば自宅療養を要した健次少年の存在は困窮を増すだけの存在であったはずであるから、そのような状態の中で、上記のような述懐しか見られないということは、まずあり得ないと思う。逆に、それほど困窮した家庭ではなかったと考えるならば、これらの点は全て氷解する。大富豪のお坊ちゃんであったとは言わないが、人並み程度かそれ以上の暮らしが出来るレベルの家庭環境で育てられたというのが実態に近いのではないかと、というのが筆者の推測である。

要するに、近藤氏の幼少期から青年期を考えると、彼を取り巻く環境は、貧しい、苦しい、という言葉で表現するよりは、むしろ大事に、温かく守られ続けており、恵まれていた方ではなかったかという思いがしてならないのである。無論、部分的、一時的、主観的には苦しいこともあったであろうが、記録されたものから客観的に見ると、それとは違った上のような見方もできるように思える。

ただし、以上の話は、陸軍少年通信兵学校の入学と従軍、

さらには戦後復興期を経て独立起業、その後も粉骨砕身の苦労を重ねたこととは、別のものである。近藤氏は確かに人一倍の苦労を重ねて成功を勝ち得た人物である。そのことは強調してもしすぎることはない。ただ、氏の半生のそのまたごく前半の部分は、苦しい貧しい等々の言葉とはそぐわない、温かで恵まれた側面も本当はあったのではないかという筆者の推測をここに記しておきたいと思うのみである。どこにも誰も指摘していないからである。

なお、さらに付言しておくが、この推測は経済的な面だけの話であり、母を早くに亡くしていることや、病気で人生が思うように運ばなかったことなど、精神的な面では少年時代から苦悩することがあったことは十分に理解できる。

補足的な人物評の部分は以上で筆を置く。

5. 近藤文庫

平成5年と平成16年の2回に亘る近藤氏からの寄付金は、浅羽町立図書館（以下「浅羽図書館」に統一）にとっては膨大な金額であった。なにしろ、当時の同図書館

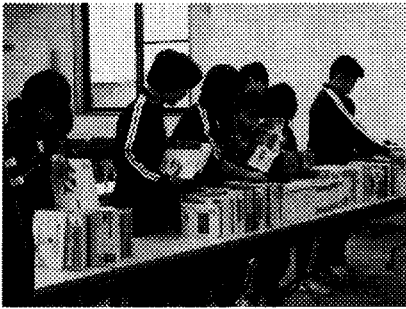


の年間資料購入費は500万円程でしかなかったのである⁽⁶¹⁾。そこに1千万円の資料購入費が突如、舞い込んで来たのである。図書館がどれほど潤ったかは想像に難くない。しかもそれが2回である。

この寄付金は全額が資料購入費に当てられ、その年度内に全てが消化された。これによって浅羽図書館が新しく購入した図書等は、平成5年度が1204冊、平成16年度が4167冊で計5371冊（視聴覚資料を含む）である。1回目は単価の高い参考資料文献等が多かったため冊数は少ない目であったが、2回目は単価の安い図書が中心で冊数が多く、しかも児童向けの本が多いことが特徴である。4167冊のうち児童資料は2137冊、絵本が931冊でこの時の全体の73%に当たる。当時の浅羽図書館がいかに子どもたちの読書環境を整えることに心を注いでいたかが分かる。

これらの資料は現在、浅羽図書館内全体にわたって配架されているが、外から見ただけでも他の資料と簡単に見分けることができる。蔵書ラベル中央に青色のストライプが入ったもの（平成16年度購入分）、又は蔵書ラベル下に青丸のシールが貼付されているもの（平成5年度購入分）がそれである。但し青丸のシールがあっても一部に例外がある。該当・非該当の正確な判断は資料を実際に開いてみると確認できる。図書の裏表紙を開いた所に、近藤氏からの寄付によって整備できたことを示す寄贈シールが貼られているからである。

その中でも特に児童向けの資料等が、図書館に入っす



ぐの前方やや左の所に、何本か書棚にまとめて配架されており、その書棚全ての上部に「近藤文庫」のプレートが貼られている。狭い意味ではこれを近藤文庫と考えても良いが、上記の通り、寄贈シールが貼られた資料は館内全体に配架されているので、正確にはその全部が近藤文庫ということになる。

近藤氏の名を冠したコーナーを誰の目にも分かる形で設置しているのは、氏に対する図書館の感謝の気持ちを形に表すためである。また、同コーナー手前の柱には木製プレートを掲げ、そこに近藤氏からの寄贈図書を収蔵していることを明記している。

「近藤文庫」は平成 17 年 2 月 25 日午後から一般への貸し出しが開始された。近藤氏の 2 回目の寄付は前年の 10 月であり、それによる購入図書の選定が地元の幼稚園、小学校、中学校の教員と一般のボランティアの協力を得て行われたのが 11 月末である。それから約 3 ヶ月後に 4 千冊以上の資料が利用可能となった訳であるが、その背景には、職員が数名という小さな町の図書館の実情から考えると当時の担当者の並々ならぬ苦労が想像される。

資料を一般に利用してもらうためには蔵書登録と配架が必要だが、配架直前に、前述の寄贈シールを貼る作業があった。一つずつ手で貼らなければならないので手間がかかるし、その上に量が膨大なので簡単には済まない。この時、大いに力を発揮してくれたのが地元の中学生であった。浅羽地域唯一の中学校・浅羽中学校が、これに協力してくれることになった。

平成 17 年 2 月 16 日、19 日の 2 日間にわたり、延べ 63 人の浅羽中学の生徒がボランティアとして図書館 2 階の大きな部屋に集まり、作業を手伝ってくれた。初日にシール貼り作業を行い、2 日目には番号順に図書を並べ直す面倒な作業を行った上で、少しずつ 1 階の書棚に運んでは配架する作業を行った。中学生が自分の手で書棚に本を 1 冊ずつ配置した訳である。しかも開館中なので一般の来館者が居る中を、息を殺しながら、である。

その姿を見て図書館の職員は大いに喜んだ。自分たちの仕事が減ったからではない。子どもたちが「図書館作り」に直接関わってくれたことそれ自体が嬉しいのである。当時の浅羽町立図書館長は、作業終了後のお礼の言葉の中で「皆

さんが大人になって、お父さんお母さんになって、自分の子どもと一緒に図書館に足を運んだ時に、今日のことを思い出して、お子さんに語って下さい」と述べている。中学生本人だけでなく、将来その子らが産み、育てた未来の子ども達にまで思いを馳せているその発想は、ノルマをこなすためだけに嫌々日々の仕事をしている凡庸な職員であったならば絶対に出でこないものである。浅羽図書館は、規模は小なりと言えども、職員の心意気は並ではない。

いつまでも自分たちの図書館として親しみ続けてもらえるような機会を地元の中学生、そして、まだ見ぬ未来の子どもたちにも提供できたという喜び、——これも目には見えないけれども近藤文庫が地元にもたらした産物の一つである。

このように「近藤文庫」は、地元の子どものために、子どもたち自身の手によっても作られた文庫である、という特徴を持っている。地域の後進を育てる事業に、近藤氏の寄付はしっかりと活かされていると言えよう。

この図書館で学んだ地元の子子どもたちが、近藤氏に負けない位の立派な大人として次々に成長し、社会と日本をより良くするために活躍してくれることを切に期待する次第である。

【追記】「近藤健次氏と近藤文庫紹介展」に関して補足しておきたいことがある。この展示会に当っては、会場に配布するパンフレットの印刷費のみ、袋井市立浅羽図書館から支援を頂いた。決して高価なパンフレットではなく、モノクロ印刷で写真もシャープには出来ないレベルであったが、それでもこの支援がなければパンフレットの発行はできなかった。浅羽図書館には感謝申し上げる次第である。

それ以外で、パンフレットの製作や展示資料の製作・準備で要した物品や雑費については、全て新袋井フォーラム側が負担し、近藤健次氏及び髭ビー・エム・エル様、また袋井市及び浅羽図書館からは金銭的支援を全く受けていない。以上を明記して、支援を受けたから氏の紹介をした訳ではない事を断っておきたい。

実はこのとき既に新袋井フォーラムは平成 21 年度の収支が大幅な赤字であった。仕事を引き受けるに当っては、印刷費補助の話も初めは無かった。フォーラム側の担当者が全て自腹を切る覚悟でこの仕事を引き受けたのが実状である。なぜなら、新袋井フォーラム会則第 4 条には、自らが行う事業を幾つか列記しているが、その中に「故郷の誇りと自信を高めるような情報発信に関する事項」があり、これと合致する仕事であると考えたからである。これが、今回の仕事を引き受けた第一の理由である。

さらに、近藤文庫設立当時の浅羽町立図書館館長であった星野矩昭氏と、同図書館主事であった鈴木つね子氏が、現在、新袋井フォーラム事務局員として粉骨砕身の仕事ぶりを発揮して下さっている。このお二人が今回の話の仲介役であったことが今一つの、しかも有力な理由である。お二人から、図書館が困っているから助けて欲しいと言われて見捨てておけるはずがない。しかも、お二人とも今回の実務を担当するという。自らも困難を背負う覚悟での救援要請である。ここで背を向けては日本人ではない。武士は情けである。新袋井フ

オーラムとても、規模は小なりとは言え武士は食わねど高楊枝の精神は持ち合わせている。赤字であることは断る理由にはならない（もともと、正直な所は苦しいの一言に尽きる）。かくして今回の展示会が実現に至った次第である。

なお、資料に関しては近藤氏及び髙比伊・エム・エル様から大変にお世話になった。パンフレット及び本稿掲載の近藤氏の肖像及びBML関連の写真も同様である。また、近藤文庫整理ボランティアの中学生達の写真は星野矩昭氏からの提供である。ここに記して感謝の意を表する次第である。

また、今回の紹介展で実際に展示の実務を担当したのは、星野矩昭、鈴木つね子、浅羽美智子、村松弘子、小澤壮吉、及び筆者の6名である（敬称略。以上全て新袋井フォーラム会員。星野氏は浅羽図書館臨時職員として今もここで勤務中）。多忙な中、短期間のうちに仕事を成し遂げて下さった実務担当の各位にも感謝の意を表する次第である。

- (1)『静岡新聞』2007年7月13日の記事に、「個人の寄付としては異例の高額」とある。
- (2)『中日新聞』（中・東遠版）2008年7月25日。
- (3)袋井市『浅羽支所周辺地区/エントランス広場基本構想（案）』（平成21年8月）1頁、6～8頁。
- (4)袋井市立図書館のHPの「展示予定」ページでは、2010年1月末時点で浅羽図書館において3月3日～4月29日まで「郷土につくした人/近藤健次さん」の展示を行うことが告知されていた。市が発行する『お知らせふくろい』平成22年2月15日号6頁及び袋井市教育委員会が発行する『ふれあい（生涯学習情報誌）』平成22年2月15日号2頁でも、「近藤健次氏と近藤文庫紹介展」が4月29日まで開催されることが告知されている。展示会名称の変更は筆者の判断による。以上の告知では開催末日がいずれも4月29日となっていたが、同日は祝日で図書館の休刊日となるため、浅羽図書館の判断（2月23日）で、4月28日までの開催に変更することとした。
- (5)近藤健次『七転八起——BMLとともに四十年』（平成5年3月25日、髙比伊・エム・エル発行、【近藤氏の自伝】）14頁。
- (6)同上22頁。
- (7)同上13頁。
- (8)同上20頁。
- (9)袋井市『広報ふくろい』平成19年8月1日号、3頁。近藤氏の自伝では、病気と誤診されなければ、元気に働いて自分の糊口をしのぐ位にはなっていたであろう、という思いが、日を追って「怒り」に変わり、元気を回復して再上京・就職を決意すると、「同じ職に就くのならば、医療関係の仕事をしたい」と漠然とながら思った、と記されている（同上、29頁）。
- (10)前掲『七転八起』33頁。
- (11)同上39～40頁。但し同199頁の年表では「十二月、前期繰上げ卒業となる予定が、病気のため卒業見送りとなる。」とあり、矛盾する。ここでは本文中の記述に従った。

- (12)同上、41頁
- (13)あさひ銀総合研究所編『ユニーク企業の経営哲学（第1巻）』（平成5年9月15日、栄光出版社）16頁。本書の冒頭に近藤氏へのインタビュー記事が掲載されている。ちなみに、近藤氏の次に掲載されているのが浜松ホトニクス社長の晝馬輝夫氏である。
- (14)前掲『七転八起』71頁
- (15)「トップインタビュー/近藤健次氏」（『あさひ銀総研レポート』2001年6月）26頁。
- (16)前掲『七転八起』16頁に、「おそらく日本一小さなブラッドバンク」とある。
- (17)「企・業・人/臨床検査で最先端を走り業界を装置産業にした男/髙比伊・エム・エル」（『週刊ダイヤモンド』1995年7月1日号）34頁。
- (18)注(13)に同じ。
- (19)前掲『七転八起』90～91頁。
- (20)同上91頁。
- (21)『BML創立40周年記念誌』（1995年7月1日、髙比伊・エム・エル）95～96頁。
- (22)同上104頁。前掲『七転八起』も「このシステムの完成は業界初の壮挙」と述べている（147頁）。
- (23)前掲『七転八起』147～148頁。なお拙文「近藤健次氏と近藤文庫紹介展」パンフレットでは、米国メトバス社視察の後に、昭和49年の第一次コンピュータシステム導入があったと読める記述をした（4頁）が正確を欠いていた。
- (24)髙比伊・エム・エル「有価証券報告書」（2006年6月29日、EDINET公開資料）6頁による。但し、2009年6月発行の髙比伊・エム・エルの『会社案内』（パンフレット）所載のグループ企業名（26頁）とは一部一致せず、この間に変更があったものと考えられるが、グループ企業数が21社である点は同じである。
- (25)上記『会社案内』添付の「BML COMPANY PROFILE」中の「事業所・ラボ一覧」より小栗が数えた。
- (26)前掲『BML創立40周年記念誌』19頁。そこで近藤氏は、「世界でも余り例がないと思います」とも述べている。
- (27)前掲『会社案内』6頁。
- (28)前掲『週刊ダイヤモンド』35頁、及び前掲『七転八起』177頁。但し、『週刊ダイヤモンド』は1995年、『七転八起』の該当箇所は昭和61年の近藤氏の講演記録であり、現時点から見ると15～24年前のことなので、現状は異なる可能性がある点に注意。
- (29)前掲『ユニーク企業の経営哲学（第1巻）』では「収益力では業界トップ、売上規模で第二位の地位を不動のものとし」云々の記述（15頁）があり、前掲『週刊ダイヤモンド』記事でも「売上げ第二位、利益率は第一位」と記述（35頁）している。小栗が平成22年2月に髙比伊・エム・エル経営企画部次長・仲田克己氏に問い合わせた所によると、売上第二位、利益率第一位、という表現は昔はよくしていたが、2005年7月に臨床検査業界トップのSRLが試薬メーカーの富士レボオ（この利益率が高い）と合併して「みらかホールディングス」が出来て以来、その臨床部門の売上データが正確に掴めなくなったため、臨床部門に関する利益率比較が困難となり、利益率が第一位か否かは確認ができないので、最近では利益率については言わなくなった、とのことである。

- (30) 前掲『週刊ダイヤモンド』35頁。なお現在に至るまでも赤字を計上したことがない点は、前掲『BML創立40周年記念誌』220～221頁掲載のグラフ、及び『BML創立50周年記念誌』(2005年7月5日、(株)ビー・エム・エル)34～101頁に記された創業以来の年別売上高の具体的な数値(2004年度分まで)、(株)ビー・エム・エル『株主のみなさまへ/第54期中間報告書』(2008年11月13日時点までの情報=表紙裏)8頁掲載の財務ハイライト(05年から08年=第54期の第2四半期分まで確認可)、さらには現時点で(株)ビー・エム・エルのホームページ上で公表されているデータを見れば、これを確認することができる。
- (31) (株)ビー・エム・エルのHPで公表している財務指標から確認した(2010年2月)。詳しい数字を示すと、2008年度のグループ企業の連結売上高(2009年3月時点の値)は771億9800万円である。
- (32) 前掲『あさひ銀総研レポート』28頁。なお現在では、みらかホールディングス、ファルコバイオの2社も東証一部上場を果たしている(前掲、仲田克己氏より)。
- (33) 上記『あさひ銀総研レポート』26頁、及び前掲『BML創立40周年記念誌』19頁。前掲『七転八起』でも「これまで困難とされてきた検査の前処理行程の自動化を実現した」とある(158頁)。
- (34) 平成20年8月に「新フロンティア」が完成稼動したことで、システム全体の次世代型への移行が完了した。これより先、「シンフォニー」システムでは平成18年10月に「新シンフォニーケミストリー」(生化学検査)が、翌平成19年3月に「新シンフォニーヘマトロジー」(血液検査)が稼動している(以上全て、前掲『株主のみなさまへ』2頁)。
- (35) 以上3つの単位時間当りの検体数の値は、(株)ビー・エム・エルの会社紹介DVD「バイオ&医療情報システム企業 ビー・エム・エル」(同社製作)による。このDVDは平成22年2月5日に、同社から筆者に提供されたものである。ただし前掲『会社案内』(2009年)では、血液学検査の能力を「毎時4,500検体」と記載しており(9頁)、DVDで紹介されている値と異なっている。ここではDVDの方を採用した。
- (36) 同上DVD。前掲『七転八起』でも「おそらく世界一」(158頁)と記されており、前掲『BML創立40周年記念誌』でも「世界でも初めてのケース」(20頁)とある。以上は近藤氏自身によるものだが、前掲『七転八起』では別に汐澤隆氏が「今日、BMLの装備率は業界にあって、世界随一と言われる」と述べている(134頁)。
- (37) 前掲『BML創立50周年記念誌』75頁。共に同じ年。
- (38) 以上、前掲『会社案内』6～7頁。
- (39) 前掲DVDによる。
- (40) 前掲『会社案内』6頁。
- (41) 前掲『BML創立40周年記念誌』108頁。
- (42) 前掲『七転八起』155頁。その他同じ頃に、肝炎マーカーのHBs抗原・HBs抗体、e抗原・e抗体の新検査技術なども学科で発表している(同)。
- (43) 前掲『BML創立40周年記念誌』114頁。
- (44) 前掲『BML創立50周年記念誌』20頁。
- (45) 前掲『あさひ銀総研レポート』27頁。
- (46) 前掲、仲田氏からの情報提供。なおシェアは月刊『新医療』2008年9・10・11月号掲載の数値である。
- (47) 以上、前掲『BML創立50周年記念誌』102頁。
- (48) 前掲DVD及び前掲『会社案内』、同社HP等を参照。
- (49) 前掲『七転八起』で近藤氏自身が、「私の半生の中で1つだけ誇れるものがあるとしたら、—それはどんなにつらい時でも決してあきらめなかったから、そのつど新しい道が見つかった」と述べている(194頁)。
- (50) 前掲『七転八起』34頁。
- (51) 注(9)を参照。
- (52) 前掲『あさひ銀総研レポート』26頁
- (53) 前掲『ユニーク企業の経営哲学(第1巻)』17頁。
- (54) 前掲『週刊ダイヤモンド』35頁。
- (55) 平成22年2月5日、新袋井フォーラム会長の小原望氏、同副会長の下山好治氏、及び筆者の3人は、東京にある(株)ビー・エム・エルの本社に近藤氏を訪ね、1時間程面談することができた。その席で筆者は、大型電算機の導入に対しては世間から冷たい目で見られたそうですが、それでもその道を止めなかった理由は何でしょうか、という質問をしたところ、氏は即座に、米国トパス社の視察で刺激を受けて、間違いないと思った、と答えた。更に、勝算はあったのでしょうか、と質問すると、即座に、あった、と答えた。
- (56) 前掲『七転八起』129頁。このとき独立独歩の道を進むことを改めて決意したことが、その後のBMLにとってターニングポイントであったと思う、と近藤氏自身が述べている。換言すると、当時は経営的には確かに苦しかったが、横柄な財閥系企業への対抗意識から、益々努力を重ねて行ったから、今日のBMLがあると言うことになる。ターニングポイント云々の言葉の前に「今わが社の現況を見るにつけ」云々という前置きの言葉が置かれているので(同)、このように読む以外にない。近藤氏の勝利宣言である。
- (57) 同上19頁。
- (58) 同上19～20頁。
- (59) 同上21頁。
- (60) 同上22頁。
- (61) 以下、近藤文庫設立時の模様や数値については、当時の図書館長・星野矩昭氏、及び当時の図書館主事・鈴木つね子氏から伺った情報に基づく。